

金沢地方裁判所 御中

氏 名 浅田 正文
避難前住所 福島県田村市(旧緊急時避難準備区域)
避難後仮住い 石川県金沢市

意見陳述 (何処で死ぬのか)

1. はじめに (第2の人生が奪われた)

浅田正文と申します。福島県田村市都路町から石川県金沢市へ避難し早くも3年になろうとしています。私の住んでいた所は、原発から25Km、緊急時避難準備区域に指定されていました。生活基盤を根こそぎ奪われ、**終の住処を奪われた今、<何処で死ぬのか>**ということが頭を離れません。原発の無い世の中になることを祈り願い陳述します。

私は19年前に第二の人生を楽しむべく、早期退職し東京から福島県都路村(現田村市都路町)^{みやこじむら}に妻と移り住み、自給自足を目指した生活、山菜を摘み、冬には薪ストーブの暖かさに心も温まる生活をしていました。原発事故によりそれらが一瞬にして奪い去られてしまいました。福島へ戻ったとしても自給自足の「生き生きした生活」は望むべくもありません。昨年(2013年)5月の測定では、我が家の原木椎茸は6,000ベクレル/Kgあり基準値の60倍もの数値でした。そして3年近く経っても我が家から150m程の杉林の空間線量は5 μ Sv/hのままです。これは金沢市の約100倍もの放射線量です。

我が家の庭の線量は除染(以下「移染」と表示)して1/3~1/2程度に下がりましたが、元々線量が高いため安心して住めるレベルではありません。現在も出口の無いトンネルの中に放り込まれたようで、気持ちの浮き沈みが激しく先の見えない不安定な精神状態が続いています。不本意ながら、告訴や裁判、脱原発運動、等に多くの時間を割き、私の願っていた生活とは全く別のものになってしまいました。

2. 写真(パワーポイント)

福島の生活の一端と、原発事故後を写真でお示しします。

- (写真) 事故前都路の風物誌とそこでの生活
- (写真) 原発事故後の様子
- (写真) 移染(除染)の実態

3. 福島の今

3. 1 福島の今(命・健康)

事故から早くも3年になろうとしています但未だに13万人もの人々が避難生活を強いられています。福島県の**事故関連死**は1,605人であり宮城県878人、岩手県428人に比し群を抜いています。福島県の**災害直接死**1,603人を上回っています(2013-12-17 福島県発表)。**自ら命を断った**痛ましいことも度々報道されています。「事故による死者ゼロ」などとも言えるものではありません。

報道されていませんが**多くの方が心筋梗塞**で亡くなられています。お隣のお爺さんも心筋梗塞でした(2012-01)。医学的な因果関係は分かりませんが福島で明らかに起こっていることなのです。子どもの**甲状腺がん**が増加しています。2014-02-07 福島県健康管理調査によりますと癌確定と疑いの合

計が74名、前回調査(2013-11)では58名、この3ヶ月間に16名も増加しています。原発事故前は十代の甲状腺がんは100万人に1~9人(国立がん研究センター等：福島民報2014-02-07)と言われてきましたのであまりにも異常です。しかし県は原発事故の影響とは考えられないとの見解です。

靴を履けない子ども、直ぐ転ぶ子ども、扁平足の子ども、そして骨折が増えています。保育園へ通うのになるべく被曝させまいとして、自宅の玄関から保育園の玄関まで車で行くため、歩くことがめっきり減ってしまったのです。事故直後の屋外活動に制限があったことから**運動不足、肥満**になりその影響が今も続き、10歳男子の肥満は全国平均に比し10.37%も多くなっています(2013-12-13：25年度)。持久走ができない子どもが出ています。

千葉県柏市から富山県へ母子避難した母親は「<ホットスポットだ><汚染状況重点調査地域だ>と騒がれながら、関東の子供達は何の健康調査もされていない。原発事故当初これらの地域に住んでいた条件で定期的に将来にわたる健康検査を受ける権利を、公費にて保障して欲しい」と苦しみを訴えています。このことから分かるように被害は福島に留まりません。

3. 2 福島は今(こころ)

先日聞いた話です。福島県から石川県へ一家揃って避難したものの、夫が仕事探しで外出が多く、家に残された妻が不安にかられ**新興宗教者**の優しい声掛けに惹かれ入信し、子ども・家族は二の次になり現在別居状態で**家庭崩壊**に陥ってしまいました。他にも夫婦間で健康・命・人生観の違いが露わになり福島県では**別居・離婚**が増加しています。そして避難するか否かや自給野菜を食べるか否かで**祖父母との断絶**、等々。

不登校が全国では減少しているのに福島県の小中学校は5%増加、高校は2割以上増加しています(2012年度 文部科学省調査)。不登校になった息子の母親は「親の転勤による転校と異なり避難による転校は環境激変・体調悪化・学習ブランクなどあらゆることが不登校に関係しています。母親のストレスも子どもに影響を与えない筈はありません。フリースクールへ通わせるとしても費用や場所の問題に直面しています」と心の内を訴えています。

放射線汚染下の生活では日々決断しなければならないことに次々直面します。例えば洗濯物を外へ干すか、窓を開けるか、汚染されているかもしれない不安を抱えつつ町内地域の清掃活動・草刈りに加わるか、**コミュニティの分断**、避難者増加(人口減)による町内会維持の厳しさ、きりがありません。

次は武藤類子さん(福島原発告訴団長)のスピーチの一節です。翻訳され世界を駆け巡っています。

武藤類子さん “さようなら原発5万人集会”スピーチ(2011-09-19 東京・明治公園)

(略)すばやく張りめぐらされた安全キャンペーンと不安のはざま、引き裂かれていく人と人とのつながり。地域で、職場で、学校で、家庭の中で、どれだけの人々が悩み悲しんだことでしょうか。毎日、毎日、否応無くせまられる決断。逃げる・逃げない? 食べる・食べない? 洗濯物を外に干す・干さない? 子どもにマスクをさせる・させない? 畑をたがやす・たがやさない? なにかに物申す・黙る? 様々な苦渋の選択がありました。

そして、今。半年という月日の中で、次第に鮮明になってきたことは、「**真実は隠されるのだ**」「**国は国民を守らないのだ**」「**事故はいまだに終わらないのだ**」「**福島県民は核の実験材料にされるのだ**」「**ばくだいな放射性のゴミは残るのだ**」「**大きな犠牲の上になお、原発を推進しようとする勢力があるのだ**」「**私たちは棄てられたのだ**」

私たちは疲れとやりきれない悲しみに深いため息をつきます。(後略)

避難者が賠償金でパチンコ・飲み屋への報道がありますが、仮設住宅であることが無くなり**生き甲斐を失った**やるせない気持ちを押し量って下さい。避難者を受入れた地域はスーパーマーケットが混雑し道路が渋滞し故意のタイヤパンク、など**避難者と受入地域との新たな葛藤**が生じ、ぎすぎすした町に変わってしまいました。

福島県から石川県へ350人が避難していると言われていますが、金沢市やボランティア団体主催のイベントに参加するのは多くて20人程度に留まっています。心の底に何があるのだろうか。胸が締め付けられてなりません。

我が家は慣れない**賠償交渉**に疲れ根気が続かず、理屈に合わないと思いつつも半ば諦め妥協し合意してしまいました。例えば2年分の薪や準備していた野菜の種も賠償の対象外にされましたが、文句を言う気力が出ません。

3. 3 福島の今（生計・生活）

農家は避難前には米や野菜を自給していたので現金がそれ程必要ではありませんでしたが、仮設住宅に入居し田畑が使えず全てを購入せざるを得なくなり、**生計の破綻**をきたしています。昨年末に「米がほしい」とのSOSが川内村の避難者から発せられました。

関東地方からの避難者は「**母子避難による二重生活の経済的な理由から被曝の不安を抱えての帰還**、逆に一家揃って避難を決意しても男親の就職は年齢制限、年収、職種などハードルが高く避難先での就職が困難に直面しています」と訴えています。苦しみは福島県民だけではありません。

私ごとですが汚染されて住めなくなり**資産価値ゼロになった我が家に固定資産税**が課せられています。不服申立をしたところ督促状が送られてきました。大した金額ではありませんが固定資産税納付をいつまで拒否できるか憂鬱でなりません。

3. 4 福島の今（自然環境・減容化焼却炉）

移染で集められた草・枝の体積を減らすために減容化と称し焼却が進められようとしています。汚染された物を燃やすと排気と共に放射性物質が放出されフィルターで完全除去はできないと言われています。それにも拘らず福島県内にこのような**減容化焼却炉**が10~20基も建設されようとしています。次は農業青年の声です。

吉田寛爾(27歳 農業)20-01-21「福島民報」投書

(略)現在、田村市都路町と川内村の間に放射性廃棄物を焼却する減容化施設を建造する計画があります。最近このことが頭を離れず不安で仕方ありません。(中略)奇跡的に線量が低く除染し順調に復興が進んでいる地域に施設を建てることになれば、今住んでいる住民だけではなく帰還しようとしている人たちの妨げになるのではないかと思います。復興と帰還を進めるのであれば未来を失う可能性のある施設を造るのではなく、住民が恒久的に安心して暮らせる環境を回復させることが大切です。起きてしまった事故はどうしようもないことですが、古里の今後の未来は変えられます。これ以上私たちの古里を汚さないでほしいのです。(後略)

4. 絶対安全(“想定外”は許されない)

原発事故はどれ程確率が限りなくゼロに近づき<世界最高の安全>だとしても、事故が起こればそ

の被害は距離の広がりと将来世代への影響を考えると無限大です。原発を直ちに止めること以外に絶対的な安全はありません。

石川県でフクシマと同じことが起きたらどうしますか。前の世代から営々と守り引き継いできた、兼六園、金沢城、文化施設、史跡、等々、が失われるばかりか、加賀野菜、香箱蟹、寒ぶり、さより等北陸の美味しい魚や野菜が何もかも食べられなくなってしまう。能・狂言・茶屋街もどうなりますか？

そして能登、石川県、北陸の皆さんは何処へ逃げますか。事故が真冬の、吹雪の夜の、北西の風が吹く中で、幼いお子さんを連れての凍結した道路の渋滞を、想像してみてください。福島では事故翌日は晴天にも拘わらず避難の車で国道 114 号線が大渋滞し、通常 30 分で行ける所が 3 時間もかかったのです。

5. おわりに（日本が生まれ変わるためにも）

私たちのような、「流浪の民」「原発難民」を再びつくってはなりません。次は福島県から山形県へ避難している小学生の作文です。福島県自然保護協会機関誌「やえはくさんしゃくなげ」(2013-06)に載ったものです。

丸大喜 福島県自然保護協会機関誌「やえはくさんしゃくなげ」(2013-06)

<原文は「作文と教育」2012-11-01 No. 795 本の泉社>

(略)今、ぼくの福島の家の庭はじょせん作業をしています。土や葉っぱや川の水にさわることさえも注意しなければなりません。「なんで福島の子もだけが、こんな思いをしなければならないのだろう。」こう考えると、ぼくは、とても悲しい気持ちになってしまいます。この大震災では、たくさんの悲しいことがありました。地震やつ波や原発事故で、なくなった人やけがをした人がたくさんいます。その人達のためにも、この経験をむだにしてはいけないと思います。(中略)この震災はこれからもっともっとよりよい地球になるためにおきたことだと信じています。だから、ぼく達は、震災の経験をむだにせず、未来に向かって、ぼく達の手でよりよい地球をつくりだしていかなければならないと思います。

以上、避難生活 3 年目の気持ちを陳述しました。裁判官の皆様、被告席の皆様、生活を根こそぎ奪われた被害者の心を噛みしめていただきたくお願い致します。

「今は福島のこと、いつかはあなたの町のこと」(木田節子(2013-07 参議院議員立候補者)とならないためにも。

以上(2014-02-14 記)